

統一思想の有効性に対する言語学的な証拠

ポール・J・ペリー

一 序言

本論文の目的は、言語学の分野に統一思想の諸概念を適用することにより、統一思想の有効性に対する証拠を追求することにある。私の方法は、特定の言語学的な問題を分析し、その問題に対する伝統的な解決策を論じ、それらの解決策を統一思想の見方と対比することである。私が提案しようとする見解に何らかの関係がある統一思想の諸概念は、原相論、存在論、認識論および本性論から取られるであろう。

諸時代を通して、人類は人間の諸言語の現象に対する説明を模索してきた。統一思想は、「言語機能」の仮説、ソシュール言語学における「形態」(form)と「実質」(substance)との関係の問題、および「普通言語」の可能性の問題、といった言語学の諸問題を明確にすることができる特定の言語理解の方法を持っている。統一思想の特別の貢献は、言語と思考との、また言語と文化との関係を明確化したことにある。

二 ノーアム・チョムスキーの「言語機能」の概念

「言語」という用語は、次の三つの異なる意味に用いられるであろう。(1)社会の発話(speech)行為及び筆記(writing)行為の集団的全体の根底にある抽象的な体系(例:英語、フランス語、日本語)(2)個人が自国語を学ぶことを可能にせしめる機能(例、言語機能)(3)すべての発話、筆記の体系の普遍的な属性(人間言語)。これらの内容は重要ではあるが、これらの意味の区別は本論文の議論にとってさほど重大ではない。

(一)「言語機能」の概念

マサチューセッツ工科大学の近代の諸言語および言語学の教授であるノアム・チョムスキーは、一九五七年の *Syntactic Structures* (『統語論的な諸構造』) の出版により言語学の分野に革命を起こした。(1)彼の目標は言語の諸属性を数学的な正確さをもって記述し、言語を行動主義的な見方から説明する当時、流行していた傾向に対して防備することであった。(2)その目的のために、彼は言語に対する生成的なアプローチを發展させたが、これは、言語が人間の心の研究のための最も重要な手段であることを立論している。(3)

多年にわたって、チョムスキーは、言語を生み出し理解する人間の心の能力についての一連のモデルを通して彼の見方を展開してきた。チョムスキーの体系における重要な概念は、「言語機能」の概念であるが、それは言語を習得する「生得の傾向」のことである。彼は、単純に言語を学ぶための潜在的な可能性のことではなく、むしろ、言語の形態的な諸原理についての特定の知識のことを言っているのである。彼の見方では、そのような原理についての知識は人間にとっては生得のものである。

「言語機能」仮説は多くの問題を提起する。その問題の一つは合理論者と経験論者との認識論的な論争に関連している。合理論者にとって、真理とは、経験を引合いに出す必要なしに、理性から得られる。経験論者にとって、すべての知識は経験から得られる。言語学者レオナード・ブルームフィールドは、経験論に基づいて、言語理論を發展させたが、この言語理論は、チョムスキーの理論の發展以前の三〇年間に権威があったものである。ブルームフィールドの見方について短く説明することは次の通りである。

ブルームフィールドの見方は、意味の研究に対する構造主義的な諸原理に基づいている。それらの原理の一つは、直接観察できず物理的に計測できないすべての言語データ(情報)は非科学的なものとして拒否されなければ

ばならないというものであった。基本的な仮定は、言語についての科学的な説明を得る方法は、言語現象を刺激と反応という見方から見ることである。従って、言語学者は、話された言語の諸要素間の構造的な関係、つまり言語的な行動の「表層的な構造」を追求すべきである。ある言語社会内部の言語的実現の特定のパターンは、全く恣意的であるか純粹にしきたりである。ブルームフィールドの当時には、こうした見方は極めて人気があったが、今では言語学と大脳生理学の両方における研究によって大部分信用に値しないとされている。(4)

これとは対照的に、チョムスキーは、言語的なパターンは恣意的ではないという前提から出発し、それにより、言語習得についてのブルームフィールドの構造主義的な説明を拒否した。チョムスキーの議論は大体、言語における創造性に基づいていた。彼は、言語の習得と発展についての観察できる事実には構造主義的な議論は一致しないことに留意した。五、六才の子供が、自分の聞いたことを言葉通りに反復するばかりではなく、また以前には聞いたこともない不定に多くの文(センテンス)を作り出すこともできるということを観察した。言い換えれば、子供達は全く独創的な文を作り出すことができる。チョムスキーは、言語習得について刺激と反応という立場から説明する構造主義的な説明は、言語におけるこのような創造性を説明することができないと論じた。

「言語機能」の理論を提起するに際して、チョムスキーは、経験論的な言語学的方法から訣別し、自身を理性論の陣営の中に置いた。言語学に数学的な精密さをもたらすことのできる理論を發展させるという彼の目的を視野に入れつつ、チョムスキーは、人間は言語の知識を含めて、知識を得させる特殊な「精神的機能」を付与されていると主張した。(5)しかし、批評家にとっては、チョムスキーは彼の先駆者たちが避けようとした落とし穴にはまってしまった「心理主義者」なのである。言い換えれば、経験論を拒否するに際して、(6)チョムスキーはその思想体系の積極的な要素を組み入れることができなかったのである。(7)

「心理主義」というレッテルは、言語機能に対する彼の理論に相応しい哲学的な基礎が欠けていたためであったと言える。例えば、言語機能は人間には存在しているが、動物には存在していないと彼は指摘しているが、それはなぜなのかを彼が説明しようとした際に、彼は哲学的に満足のゆく解答を示すことができなかった。彼は次のように述べている。

……思想の表現として、言語機能によって与えられた手段をもって、言語を自由に、かつ適切に、また創造的に用いる能力は、人類の特有の特徴でもあり、他のどこにも重要な類似物を持たないということは妥当な推論であると私は思う。言語の神経的な基盤はほとんど神秘であるが、他の霊長類には見いだされない特定の神経構造および総体的な組織(例)lateralization)さえもが基本的な役割を演じていることはほとんど疑いえないことである。(Chomsky 1975, 41) (強調は引用者が加えた)

チョムスキーはここで死に物狂いでなんでも試みようとしているように思われる。要するに、チョムスキーの説明は、動物の体と較べた時、主に人体における相違点に基づいたものである。人類における言語の創造的な使用の能力の存在を説明するのに lateralization のような特定の神経構造や現象さえもが重要な役割を演ずることを私は論じているのではない。(8)しかし、統一思想の観点から見ると、この説明は不完全であり哲学的に不満足なものである。統一思想の見方を解説するために、二つの韓国語の表現を紹介しよう、つまり、性相と形状である。これらの用語は基本的に「内性」と「外形」を意味し、統一思想における鍵となる概念を表している。性相は内的な実在(例えば、心)のことを言い、形状は外的な実在(例えば、体)のことを言う。これらの用語につ

いては、以下において、思考と言語との関係と脈絡の中でさらに説明することにしよう。(9)

言語機能に対するチョムスキーの説明が不完全であるのは、それが人間性の形状(外的)の側面、つまり肉体のみを考えているからである。人間は性相(内的)の側面つまり霊人体をも持っている。(10)人間の諸言語を表す「言語機能」が人間にあって動物にないのは、人間が霊人体を持っており、動物はそれを持っていないからである。(11)

(二) 思考と言語との関係

思考と言語は性相(内的な側面)と形状(外的側面)の関係で存在している、と統一思想は考える。前にも述べた通り、これらの韓国語の用語は普通(英語では)、internal character (「内性」)と external form (「外形」)と訳されているが、この訳語は、韓国語の用語の豊かさをあまり良く伝えてくれない。従って、統一思想は韓国語の用語をそのまま利用するのである。(12)

これらの概念を人間性に適用して、人間は性相と形状の統一体である、と統一思想は述べる。人間は二重心、つまり生心と肉心を持っている。これは、人間が二重の人間、つまり霊人体と肉身とであるからである(EdT.99)。人間は生心を付与されているので理性を持っている。従って、人間は考えることができる―そして、このために人間は動物と異なるのである(EdT.47, 図七「存在者における性相と形状の二段構造」を参照されたい)。(13)

思考は、人間の言語を通して外的に現れることのできる内的な実在である。言語は、思考の形状(外的な側面、体、または「衣」)、あるいは思想の表現のための乗り物と見ることもできる。従って、思考は言語の性相的(内的)な側面と見なすことができる。

ここで、人間における思考活動に対する統一思想の見方を論ずることは有用であるかもしれない。統一思想に

よれば、人間の思考は神におけるロゴスに似ている。人間の心における思考活動は、神の心におけるロゴスを創造する活動に相当する。神のロゴスについての短い説明は次の通りである。

ロゴスとは、目的を中心とした内的性相と内的形状の授受作用によって形成された新生体である。内的は観念、概念、原則および数理を指し、他方、内的性相は知（感性、悟性および理性）情意を指す。内的の中の理性と内的形状の中の法則が、ロゴス形成において最も重要な役割を果たす。従って、我々はロゴスを「理法」と呼ぶ。(EUT, 24)

人間の心における思考活動に関して同様の叙述を示すことができる。人間は霊人体を持っており、それは生心を含んでいる。生心は、知情意（内的性相）と共に、観念、概念、法則および数理（内的形状）を持っている。(14) 思考がいったん定式化されると、それは言語によって表現されることができる。思考と言語が性相と形状の関係で存在しているということは、言語機能は生理学のおよび肉体的な過程だけで説明することはできないということとを意味する。それは、生理学的な過程（肉心）と精神的な過程（生心）との授受作用によって説明されなければならない。

従って、チョムスキーは、人間における言語の存在について、うまい哲学的な説明を示すことができなかった。その不足の結果、彼は動物における初歩的な種類の言語の現象を扱うことは難しく思ったのである。より満足のゆく説明は、すでに論じたように、統一思想において見いだすことができる。

(三) ソシュールにおける「形態」と「実質」の概念

スイスの言語学者フェルディナンド・ド・ソシュール (1857-1913) は二十世紀における言語科学 (言語学) の基

な実在を指すのである。(16)

ソシュールの構造主義、特にアメリカ型の構造主義に対する主要な批判は、ソシュールの構造主義は「心理主義的」になってしまい、科学的なものとして分類することはできないというものである。そのような「心理主義的」な分析に対する反動は、前にも述べたように、レオナード・ブルームフィールドによる言語学への構造主義的アプローチとして現れた。

統一思想の見解から見ると、ソシュールの「形態」と「実質」との区別は、前にも論じたように、思考(言語の性相)と言語そのもの(思考の形状)との区別に似ている。

しかし、ソシュールは、内的な「形態」と外的な「実質」との関係を確立することにおいて明確でなかった。この空白のために、彼の弟子たちは、言語の外的な「実質」の重要性を無視し、内的な「形態」に集中するようになり、それにより、彼らは「心理主義者」と特徴づけられるようになったのである。これはまた構造主義者たちによる反動を引き起こし、彼らは反対の見解を採り、「言語についての唯一の有用な一般化は帰納的な一般化である」(Bloomfield, 1933, 20)と主張したのである。(17)

(2) ソシュールの見方に対する統一思想の再解釈

両極端の中間のバランスの取れた見方は、統一思想を通して得ることができる。前にも述べたように、統一思想は、言語は思考の形状的側面であるという意味で、言語を思考の体現と見なす。これは、言語が、思考の諸特徴を受取り、思考の体現となる潜在的可能性を持っていることを意味する。例えば、明確な思考は明確な言語という結果となり、混乱した思考は混乱した言語という結果となる。同様に、人の思考は人がそれを言語的に表現

するにつれてよりはっきりとし、いわば、進んでいくにつれてその思想を發展させるということがしばしばある。(18) 従って、理想的なのは性相と形状との調和的な関係である。それで、これらの側面のいずれか一方を無視することは正しくないであろう。行動主義者がしてきたような、「形態」(内的な側面)を無視することは間違いであるが、それとちょうど同じように、ソシユール派の幾人かの言語学者たちがしてきたような、「実質」(外的な側面)を無視することもこれまた間違いである。

この問題に関する一層の解明は、統一思想の「創造目的」の概念から得られる。これは、神が人類と宇宙を創造したところの目的である。創造目的は神の心情の衝動を実現することである(BUTZ参照)。創造目的は、外的四位基台を通して―つまり、実体的な現実の創造を通して―初めて完全に実現される。人間の場合においてもまた、創造性は、何であれ、計画したり考えたものが実体化されることを通じて初めて完全に実現される。統一論理学が、思考の目的は実践のためであると述べているのもこのためである。

言語における思想の表現活動は実践の一形態である。例えば、偉大な本について考えるが決して執筆しない人は偉大な作家と考えることはできない。(19)

それで、ある意味では、言語の内的な側面は実際の言語的な発話において表現されることを慕い求める。従って、言語の外的な側面を無視することは正しくない。この問題を統一思想の観点から見ることにより、我々はソシユールの「形態」(内的)と「実質」(外的)との間のバランスの取れた関係を得ることが出来る。従って、ソシユール言語学は、心理主義の欠点を避けるためには統一思想によって補足されなければならない。

それにもかかわらず、ソシユールが言語の実質ではなく「形態」に重点を置いていることについて注目に値することは、彼が言語の普遍化への道を指し示したということである。言語は、それ自体がいわば、その外的な「衣」

に依存しないならば、すべての言語に共通な言語の内的な実在が存在するに違いない。これはチョムスキーの「普遍文法」の理論と大要一致し、それは「普遍言語」の可能性の問題へ直結するのである。

三 普遍言語への探求

最初この問題を言語的な観点から見てみよう。次に、言語と思想、また言語と文化との関係の見方からそれを見てみよう。

(一) 普遍言語の可能性に対する言語学的な証拠

「普遍的」という用語は、チョムスキーの生成文法において広く使用されており、そこにおいては、「普遍的」とは、すべての言語に共通な言語の諸属性のことを言う。チョムスキーは、異なる言語は文法的な文（センテンス）の構造において同じ形態的操作を利用する、ということを指摘している。彼は自分の合理的な言語哲学をこのような所見の上に基礎づけている。

チョムスキーは、人間は普遍文法に対する生得の先験的な知識を持っており、それは表層的構造においていかに異なっているように見えるかにかかわらず、すべての言語の共通の基盤を構成する。言語学の目的は簡単に言っただけの通りである。

すべての言語に当てはまるほど十分一般的であり、……かつ我々が言語とは呼びたくはないような他の意

思伝達体系、または他のどんなものにも当てはまるほど一般的ではない人間言語の構造の演繹的な理論を構築することである。言い換えれば、言語学は、人間言語の普遍的で本質的な属性を決定すべきなのである。(Lions, 1970, 110-11)

チョムスキーは、言語における三つの構成要素、つまり統語論的な構成要素と意味論的な構成要素と音韻論的な構成要素とを区別する。言語の表層的な構造は、音韻的な構成要素を含んでいる。従って、諸言語間の相違は音韻学において見出だすことができるのに対して、意味論的な構成要素は諸言語の間で不変であり、統語論的な構成要素は、音韻論的と意味論的の両構成要素を組み合わせる。(20)

チョムスキーは、人間の心は「初期状態」あるいは「生得的な状況」を持っており、これが、人間の心をして環境からのデータにさらされることにより言語を学ばしめる。人間はタブラ・ラサのような立場から出発するのではなく、むしろ子供は自然に知っている生得の言語学原理を持って出発するのだとチョムスキーは信じている。こうした原理は、実は体験から学習されるのではなく言語的なデータにさらされることから初めて活性化される。チョムスキーは次のように言っている。

規則の性質、規則の組織、規則が則って機能する原則、規則が当てはまり、かつ規則が形成する種類の表象などに関する一般言語学の原理は、すべて「容認される仮説に制限を置く」生得の条件の一部を構成すると仮定することは妥当であるように私は思う。もしこの示唆が正しければ、子供がいかに呼吸することを学ぶのかを問うこと、あるいはその問題に関して言えば、子供がいかに二本の腕を持つことを学ぶのか

をたずねることにさしたる意味がないのと同じように、これら（上述）の原理がどのようにして学習されるのかを問うことにもさしたる意味はない。（Chomsky, 1968, 171）（強調は引用者）

「生得の条件」の諸原理はチョムスキーが「言語機能」と呼んだものを構成する。チョムスキーにとって、「人間言語の普遍的で本質的な属性」は、「生得の条件」の一部を構成する。これは、チョムスキーの言語機能についての「生得性仮説」および彼の普遍文法論の本質的な核心である。

チョムスキーの普遍文法論が本論文と関連しているのは、それが、人類が単一の普遍言語を持つことが可能かどうかという問題に言語学的な背景を提供してくれるからである。世界のすべての民族の間の共通の意思伝達の手段は、人類の熱望の最も深く最も大切にされているものの一つであるということにはなんら疑いの余地がない。単に地球の別な地方に生まれたという理由だけで、我々が人間同士と意思疎通ができないということは、我々の四海同胞および人類の団結という感覚に違反する。(21)しかし、統一思想の見方からすれば、言語は思想の外的な側面であるので、普遍言語を探索するには、その前にまず普遍的な思想体系、あるいは思想の統一の追求をより先行させなければならない。

(二) 思想の統一の探求

統一思想の見方において (EUT, 45ff)、性相と形状は主体・対象関係において存在している。性相は主体の位置（始める立場）にあるので、どんな変化も性相において始められ、それから形状へと拡張される。なぜならば、主体に従い主体と一体化することは対象の性質であるからである。(22) 思想は言語に対して主体の立場であるので、

普遍言語の可能性に関する問題は、思想の統一に関する問題に直結している。

人間の思考は、どの程度まで、またどんな手段によって統一することができるのだろうか。その問いに対する解答を見出だすために、我々はまず、思想はなぜ混乱状態にあるかその理由を追求しなければならぬ。統一思想によれば、思考における混乱の原因は、人間が紙の絶対的な真理を発見できていないという事実あるという。

古代から現代に至るまで多くの哲学者や神学者が現れ、多くのさまざまな思想を表してきた。彼らは宇宙、人生、歴史、認識、芸術などに関する広範な真理を取り扱ってきた。しかし、彼らが表した真理は、依然として相対的な真理のままであり、絶対的な真理ではなかった。我々は、ある思想が現れた後、間もなくして、先の思想に満足せず、あるいはそれに反対して、別な思想が常に現れてきたということを見てきた。これは、今日までの思想に内在する真理が、永遠的でも普遍的でもなかったからである、つまり、絶対的でなかったからである。これらの思想同士の紛争は、価値の分裂を引き起こし、やがて今日、我々が見るような大混乱の世界を生じさせたのである。(23) (アンダーラインは引用者)

人間の性質と思考には途方もない共通性が存在している。疑いもなく、人間の思考には相違点があるが、それらの相違点は、共通性と比べるとごく小さなものである。共通性のいくつかは次の通りである。つまり、自由、平和、繁栄、真、善、美、および理想などの探求である。さらに、すべての人間は価値を追求している。価値は、我々が国から国へ行くと違って感じられるかもしれないが、相違点は共通性ほど重要ではない。ある文化(圏)からまたある文化(圏)へと旅する人々は、やがて表面的な相違点の背後に、世界中の人々が共有している人間性の

根本的な現実があることを悟る。共通性は人間の心の普遍的な側面であり、それが人間の思考の統一のための基礎となることができる。

言語と思考の關係に關して言えば、「思考」という用語は、ただ単に思想の論理的な法則ばかりではなく、思想の内容——つまり、人の価値観、世界観、宗教的信仰など——をも指すのである。言い換えれば、言語は文化と結びついている。このことは普遍言語の探求という脈絡の中で、言語と文化の關係という問題を提起する。

言語と文化との關係の最も明白な側面は、人々は自分が生まれた文化(圏)の言語を学ぶということである。例えば、米國では、移民の親の子供はすばやく彼らの新しい母國の言語を学び、「以前の國」の言語は、どちらかと言えば、大変な努力をかけて初めて学ぶだろう。

人々が外國語を学ぶ時、彼らはそのような努力をするだけの理由を持っている。彼らは、自己を向上させたり、経済的な機会を見いだしたり、他の何かの利益を取得したいと望んでいる。大部分、人々に別の言語を学ぶように動機づけさせるものは、彼らが、その言語が關連している文化(圏)から獲得することのできる利得であると思われる。もし彼らが、心の中でその文化を受け入れることに気が進まなければ、その言語を学ぶことは一層難しく感じるに違いない。他方、人々が別な文化の価値に対して積極的な姿勢を持つならば、彼らは自然にその文化の言語を学ぶ傾向があるだろう。従って、もし万人が重んじることができるとするならば、人々は概してその文化の言語を学ぶことに対して積極的な姿勢を持つであろう。やがて、その言語は、事實上「普遍言語」となるかもしれない。この見方から見ると、万人によって重んじられることができ、また文化の統一のための基礎となりうるような文化の探求を、普遍言語の探求よりも優先させなければならぬ。

(三) 文化の統一に向けて

歴史上のさまざまな時代に、大きな帝国において一時的な文化統一の現象が起こった（ヘレニズム文化、ローマ文化）が、やがて統一された帝国も崩壊した。世界の大きな領域において支配的となったのは、普通、特定の国家の文化であった。しかし、そのような統一された文化はなぜ決まって崩れてきたのだろうか。

(1) 文化と文明

英国の人類学者 E・B・タイラーは、文化を「知識、信仰、芸術、道徳、法律、習慣および社会の成員としての人間に獲得された他の能力や習慣などを含めた複合的な全体」と定義している（Primitive Culture, 1871 より）。統一思想によれば、文化と文明は性相と形状として関係づけられている。つまり、文化は、宗教や芸術、哲学などの精神的な立場から見た時の人間活動の業績の全体である。文明は、科学技術の物質的な観点から見た時の人間活動の業績の全体である。(24)

国民の思想体系つまり、政治、経済、社会、教育、科学、芸術、哲学、宗教、出版、言論などについての思想は、すべて文化の概念に含まれる。それらは文明の核心をなす。統一思想によれば、宗教は文化の最も本質的な側面である。

(2) 真の文化

統一思想によれば、文化の核心は、理性か心情かいずれかを中心としたものになることができる。しかし、理想の文化は、理性ではなく心情（愛）を中心とした文化である。理性についてはなんら内在的に悪いものはないのだが、愛のない理性は自己中心性によって容易に圧倒されてきたのである。「真の文化」としての心情の重要さは、統一思想の心情の概念の分析から理解することができる。文化と心情との関係の描写がこの後に続く。

「心情」は統一思想において鍵となる概念である。この用語は自然の心のことを言っているのではない。むしろ、それは「愛を通して喜ばうとする情的な衝動」のことを言っているのである。(25) 心情は心の最も本質的な側面である。心情から、心の知情意の機能を駆り立てる力が生ずる。言い換えれば、理想的に言って、心情はすべての人間活動の動機であるべきである。従って、真の文化は、そのような活動の原動力が心情および愛である時の人間活動の全体である。真の文化においては、宗教、芸術、哲学などのすべての側面が心情と愛に基づいて営まれる。

墮落歴史において(『原理講論』後編参照)、文化は心情というよりも理性に基づいて営まれてきた。従って、文化はしばしば自己中心的で破壊的であったのである。統一運動は、人類の墮落を解決して心情と愛とに基づいた文化を確立するために始められたものである。言い換えれば、統一運動の目標は、「真の文化」を確立することである。

(3) 言語と文化との関係

人間の母国語は、社会における生活の全体と密接に結びついている。人は社会内部で言語を学ぶが、大部分、人は話された、あるいは書かれた言葉を通して教えられることによりその社会における生き方について学ぶ。

文化的な規範は、社会における人々の行動の仕方に対して多大な影響を及ぼす。例えば、だれかがある種類の食物を食べ、別の種類の食物を食べない、あるいは、彼がある仕方では食べ、別な仕方では食べないという事実、これらの事実は大体、文化によって決定される。例えば、東洋人は箸で食べるが、西洋人はフォークを使用する。それが彼らの文化(圏)においてなされている仕方であるからである。しかし、西洋で生活をしている東洋の親から生まれた子供は、素早く西洋の習慣を身に付ける。

社会との関係において見た時に、人間生活の諸側面は、社会の成員によって決定されるのであり、その限りに

において、文化は人間生活の諸側面の全体であると表現することができる。個人が社会の成員である限りにおいて、母国語の習得が起こる。従って、言語は文化の側面である。

言語は団体または社会内部の成員として資格を確認する。例えば、先にも触れた米国の移民の子供を考えてみよう。一般的に言って、これらの子供は、自分自身を彼らの社会と結びつける努力として、英語を学び、アメリカ人の言語習慣を採用したいと思っている。英語は、彼らにとっては、自分たちの新しい母国の完全な成員資格となるのである。同じことが、新参者が新しい職業に就く時にも起こる。新参者は、その団体の完全な成員であることの印として、その職業の言葉使い、特定の言葉や句節を覚えようと努力する。このことは、文化が言語の変化に及ぼす影響を示している。従って、文化的同化が言語的同化を引き起こすのである。

過去には、途方もない距離や地理的な障壁のために、団体同士が単一の文化に統合されることは難しかった。諸団体の言語同士は、時が経つにつれ次第に異なったものになる傾向があった。しかし現在、世界は一つの「地球村」になりつつある。我々の父祖たちが一世紀前に国中を旅して回ったよりも早く、我々は世界中を旅して回ることができる。飛行旅行は一般的な交通手段となっている。機動性と接近の可能性は、孤立主義を過去のものとしてしまった。国々はますます世界市場に依存している。

一つの地球村としての世界の統一を妨げてきた障壁は、地理的というよりも政治的なものであり、つまり民主主義圏と共産主義圏とを隔てている障壁であった。しかし、その障壁も今や急速に崩壊しつつあり、未曾有の協力の時代が今や始まりつつある。従って、世界の統一にとっての最後の障壁が、消滅しつつあるのである。普遍的な文化と普遍的な言語のビジョンは、もはや不可能な夢とは思われない。次の節では、文化の統一をなすための過程、および普遍的な言語に対する意味を考察することにしよう。

四 統一された文化と普遍的な言語に向けて

普遍的、あるいは国際的な言語は、言語的に多様な諸団体の間で意思伝達の手段の役割を果たす言語のことである。異なった母国語の国民同士の間で意思伝達の問題は、人類歴史において古来からの問題である。異なった時代に、この問題に対する部分的な解決策が見いだされてきた。ローマ帝国は、その西部地方にラテン語を、その東部地方にはギリシャ語を押しつけた。中国では、北方中国語 (Kao Yu) が博識の青年の世代の中で共通語として採用された。ヒンドスタニー語は、一九四七年までは、言語的に多様化したインドの国にとっては共通語であった。コーランの言語であるアラビア語は、アラビア半島、中東のいくつかの地方および北アフリカで話されている。これらの場合においては、多くの人々の第一言語は恒久的でなければ、少なくとも一時的には統一された。

もう一つの解決策は、普遍的な第二言語を採用することであった。この言語は自然の言語であるか、人工的に構築された言語であるかもしれない。強力な国々の言語は、時にはその目的のために採用される。例えば、フランス語、英語およびスペイン語は、ある程度まで国際的な言語の役割を果たしてきた。それらの言語を世界において傑出せしめたものは、その言語の起源地が大変強力で、政治、経済、宗教、思想、芸術などを通して世界の大きな諸地方をコントロールしたという事実であった。強力な国家がその文化を周辺国家に押しつける時に、それと関連した言語もまた押しつけられた。

前にも示唆したこの原理の必然的な帰結は、もしある文化を中心として世界の諸文化を統一することが可能で

あるならば、その文化の言語こそが自然に普遍的な言語として受け入れることは可能である。

人工的に構築された言語もまた国際語の候補として提示されてきた。エスペラント語は、そのような言語の中でも最も知られ、最も成功したものである。十九世紀にポーランド系ロシア人医師、L・L・ザメンホフによって発明されたエスペラント語は、既存の言語、特に西欧言語の語彙と文法構造の諸部分から構築されている。それは世界の八〇以上の国々で十万人以上の使用者を持っているが、エスペラント語は今の所、国連においても、また特定の国においても公式の認定を得ることができないでいる。

実際、世界は今なお言語的な多様性と混乱とで満ちている。従って、偉大な帝国の言語も人工的に造られた言語も、共に世界を言語的に統一することに失敗している。その理由は、統一思想によれば、いかなる国も世界の文化の統一を果たすことができなかったからである。そのような統一の要件を今、吟味してみよう。

(一) 文化の統一のための必要条件

言語の統一に関する問題の前に、我々はまず文化の統一に関する問題を解決しなければならない。文化の統一、特に大帝国による文化を統一しようとする歴史的な試みの失敗の理由は、それらの文化が中心文化となるためにふさわしい資格を持っていなかったからである。

例えば、アレキサンダー大王 (356-323BC) は、ヨーロッパの大半、地中海、近・中東、アフリカ、ペルシャおよびインドの諸地方を巻き込んで、世界の広大な地域にヘレニズムを中心として大文化統一をもたらした。統一の大運動は、エジプト、ローマ帝国、大英帝国などによっても達成された。

しかし、歴史は、支配的な文化が頂点に達してから衰退することを示している。例えば、アレキサンダー大王

によって創立されたヘレニズム文化圏は、最後に七世紀のイスラム教帝国主義の到来によって支配された。それも同様にやがて崩壊した。他の大帝国も同じ運命をたどり、「文明の興亡盛衰」が起こったのはそのためであった。歴史家たちの文明の興亡盛衰の原因については、ほとんど意見が一致していない。英国の歴史家アーノルド・トインビー(1889-1975)は、新しい文明の原因は、人々による創造的で未曾有の応戦を起こさせるような環境的な挑戦をもって始まる、と主張している。人々がその挑戦に応えて未曾有の努力をなす時、彼らは新しい文明を生じさせる。国を団結させる手段として、その社会の人々が創造性や受容の代わりに力を用い始める時に、停滞や衰退が起こる。

統一思想は文化の衰退の現象を「蕩滅の法則」の観点から見る(EBUT, 307参照)。ある国家が周辺国家の利益に貢献する時、その国家の文化の興隆が起こる。彼らの関係は相互利益の主張によって正当化される。しかし、ついには支配国家が周辺国家を損ない、搾取するようになる。それが起こる時に、支配国家は蕩滅の法則、つまり、悪なる原因は悪なる結果を起こすという法則の影響を受けるようになる。悪が支配している国は必然的に衰亡し、その文化は滅びる。いったんある文化が衰亡すると、それはもはや統一させる世界の文化的中心とはなりえない。それでは、諸文化の統一のための中心となる資格を得るためには、ある文化はどんな要件を全うしなければならないのだろうか。統一思想は、心情と愛の文化のみが諸文化の統一のための中心となることができることを示唆している。下記に叙述されたように、三つの要件がある。

(1) 諸文化の統一は他の国を侵略したことのない歴史を持つ国によってなし遂げられる

神が意図した理想世界の未来文化は真の愛の文化である。従って、それは自由に受け入れられた価値に基づいた文化である。我々は、文化を統一するために力や強制を用いることはやがて失敗に終わることを見てきた。真

の統一は心情と愛の土台に基づいて起こる。従って、他国を侵略したことの無い歴史を持つ国家のみがすべての文化を統一する国家として成功することができよう。

(2) すべての文化を統一する国は優れた宗教的な文化を持っていないなければならない

この優れた宗教的文化を中心として、宗教の統一がなされなければならない。心情と愛の文化は深く神に関連している。それは神の創造の理想が実現された文化である。この文化は神の愛に基づいているので、それは統一する文化となることができる。なぜなら、愛は統一させる力であるからである。すべての宗教は神の愛を求めているが、それらの教義が違っているために、違った宗教における愛の方向が一致してこなかった。従って、宗教の一致(統一)は、文化の統一のための前提条件としてなし遂げられなければならない。

(3) すべての文化を統一させるべき国は正義の文化を持っていないなければならない

戦争は人間の慣行の中でもっとも古いものであり、あらゆる優勢な文化は、遅かれ早かれその目標を達成するために戦争を利用するようである。しかし、統一思想によれば、戦争は人間の墮落によって起こり、従ってそれは罪の歴史と復帰歴史を解決することにより一掃することができる。(27) 真の文化の目標の一つは、神の心情と愛を中心とした生き方を確立することである。正義はそのような生き方の基盤でなければならない。

国々を不正な行動に導く問題の一つは、国家的な私利の理論、すなわち民族主義(国家主義)である。自国への愛は偉大な徳目であるが、もしその愛が盲目的な民族主義(国家主義)に変貌するならば、それは不正で自己中心的なものとなるかもしれない。自己中心的な民族主義(国家主義)と社会との関係は、エゴイズムと個人との関係と同じである。従って、すべての文化を統一しようとする国は、正義の文化を持たなければならない。この種の文化は以下の特徴を示すであろう。

- ① 共生―紛争を平定するために非暴力的方法を行使すること。
- ② 共栄―人が最低限の経済的な幸福の状況を確保できるように、製品の公平な分配の制度を確立すること。
- ③ 共義―暴力が回避できるような法的小および平和的な解決策を通して、正義の法律を施行することにより平和を保護すること。

人類歴史を振り返ると、侵略の歴史を持たず、宗教文化、伝統文化および正義の文化を持った国はほとんどない。しかし、ここで提案された分析から、そのような資格を持った文化のみが世界の文化を統一することができるであろうということは、紛れもなく真実であるように思われる。さて、今こそ我々は、議論を言語の問題へと拡大していく準備ができた。

(三) 普遍言語に対する希望

普遍言語に対する希望は、神の心情と愛を基盤とした文化の統一に対する希望に基づいており、文化の統一は、神の心情と愛を基礎として起こるに違いない。前にも指摘したように、歴史は、力の適用が文化の統一と普遍言語の確立を起す手段として失敗してきたということを我々に示している。エスベラント語を含めて人口言語は、世界的に受け入れられることには成功していない。本論文で提示した分析は、先に説明したように、心情と愛を中心としてすべての文化を統一する資格を得る国家の言語のみが真の意味で普遍言語となる可能性を持っていることを示唆している。もし、そのような言語が、力や強制によって押しつけられるのではなく、むしろ心情と愛に基づいて自由に受け入れられるのであるならば、普遍言語に対する希望は全うされることができよう。

五 結論

チヨムスキーの「言語機能」の理論に基づいた「普遍言語」の概念は、普遍言語の可能性を擁護する議論を提供することができる。同様に、言語におけるソシユールの「形態」と「実質」の概念は、言語の外貌の下に、人類に共通な言語のより深い側面があるということを示唆している。これらの二つの見方は、ある言語を他の言語から区別するものは歴史的な偶然よりも人間性の存在論的な実在から帰結しているという可能性を提起する。過去には地理的な距離と政治的な分離とが、言語の多様化の大部分の原因であった。今日、世界が一層大きなレベルの統合と相互依存に近づいている時、多様化の現象は逆転して統合に向かい、世界が「普遍言語」を達成するという可能性の問題を提起することが期待される。しかしながら、真の普遍的な言語を達成することは思想の統一と文化の統一とを仮定する。私の議論は、思想と言語は性相と形状との関係にあり、主体と対象の関係にあるという統一思想の見方に基づいていた。従って、言語は、思想が真に統一されないならば、統一されることにはできない。

思想の統一の問題は、もう一つの問題、つまり文化の統一を提起する。私は、世界は文化を統一しようという多くの努力の実例を見てきたことを指摘したが、そうした努力は、統一の過程の先頭に立つ国家がやがて衰退した時に大部分失敗してきたのである。この現象は文明の興亡盛衰に繋がりがあり、統一思想はそれを「蕩滅の法則」の観点から解釈する。

私はまたある国家が文化を統一するための中心国家としての資格を持ったための三つの前提を示唆してきた。これらの前提とは次のようなものである。つまり、(1)この中心国家は、他国を侵略したことのない歴史を持っていな

ければならない。(2)この中心国家は、優れた宗教文化を持っていなければならない。(3)この中心国家は、正義の文化を持っていなければならない。

文化統一と言語統一との繋がりは、言語と文化の親密な関係に基づいている。それはまた、もし世界の多くの人々がある文化を採用したいと思うなら、彼らはその文化と関連した言語をも学びたいと思うということもありうることである。なぜならば、言語はその文化を伝達する最良の「乗り物」ないしは手段であるからである。

そこで、普遍言語を達成しようとする努力は、大部分、思想の統一、文化の統一、そして究極的には、言語の統一を伴う、より大きな努力と繋がりがあがる。思想は言語と文化のいずれよりも内的(性相)であるとしても、これら三つの課題の關係にはなんら厳密な時間的な順序の意味はない。言い換えれば、これら三つの領域を統一しようとする努力は同時に起こりうるのである。

今日の世界における極めて様ざまな言語から見て、普遍言語に関する問題を叙述しようとすることにおいて、人はあまりに樂觀的すぎたり、あまりに「予言者的」でありすぎたりしないかどうか、人は疑問に思うかもしれない。一方では、それはそのように見えるかもしれない。慎重な人は普遍言語の問題を遠い未来のために残しておくと思われるかもしれない。他方、世界の最近の出来事は、人々が驚かされるといふことがあるということを示してきた。遠い未来のことと思われる事柄も、時には大変急速に起こるのである。それは一九八九年のベルリンの壁の崩壊や東欧の急速な民主化について事実であった。

普遍言語が世界において差し迫っている問題であると私に信じさせる三つの理由がある。第一に、我々は今、統一に向けて未曾有の国際的な再編成の時代に生きている。このことは欧州において特に顕著であるが、それは世界の他の地方においても起こっている。第二に、通信と運輸の突破は、地球のあらゆる地方をして地球の他の地

方に近づきやすくさせている。また、第三に、我々は今、神が地上に人類一大家族世界の理想を確立しようとしていると確信しており、神の計画の一部は、全人類を神の愛のもとに兄弟姉妹として結束させることのできる普遍言語を確立させることであると確信している。

註

- (1) チョムスキーは素晴らしい学者で豊かな執筆者であるばかりでなく、彼はその考えをスピーチや議論、著述において大変立派に理解させている。
- (2) 行動主義者は、言語学的なデータの複雑さが刺激と反応とに基づいた益々複雑な説明を要求してくるにつれて、自分たちは自分たちの理論によって閉じ込められていることがすぐにわかった。
- (3) チョムスキーの言語学理論を採用した人々は、概してより古い理論になおもしがみついている人々よりも、学術的な名声と大学の地位の両方において先んじた。
- (4) 例えば、ジョン・エクルズ卿は、心と脳の相互作用に関する彼の作品において、赤ん坊が言葉を学び言語的熟練を實踐する食欲さは、刺激と反応によって説明されうるどんなものをもはるかに超越しているということを発見した（と述べている）。

我々が皆知っているように、生命の最初の数カ月においてさえ、赤ん坊はたえず発声器官を練習し、それで、この、すべての中で最も複雑な運動調整を学習し始める。喉頭、口蓋、舌および唇の運動は、呼吸運

動と調整され調和されなければならない。それは運動学習のまた別な多様性であるが、今やフィードバックは聞くことからであり、聞いた音声の最初のイニチアチブによる。これが「ダダ」「パパ」「ママ」のような、最も単純な種類の単語を生み出し、これらは約一年で作り出される。発話は話された言葉からのフィードバックに依存しているということを知ることが重要である。つんばはおしである。言語発展において、認識は表現にまさる。子供は真実の言葉渴望を持っており、名前を追求し、独りでいる時でさえ絶えず練習している。例えば、名詞の不規則の単数の場合のように、自分自身の規則から発生してくる誤りをあえておかすのである。言語は単なる真似によって生ずるのではない。子供は、自分が聞くことから規則性や関係を抽象し、自分の言語的な表現を築き上げる際にこれらの原則を適用するのである。(Sir John Wexler, ed., *Mind and Brain-The Many-Faceted Problems*, Washington, D.C.: Paragon House, 1982, p. 82)

- (5) 科学における発展に歩調を合わせて、言語学に科学的な厳密性を適用しようとする試みとして、チヨムスキーは、当時流行していた言語学理論を拒否したが、それは、それらの理論が研究に対する実証主義的なアプローチを厳格に信奉（感覚的なデータからの直接的な推論に基づいた命題のみを許容）しつつも、大部分、記述的かつ分類的で、ほとんど説明の力を持たない言語理論を生んだという根拠からのものであった。

- (6) チヨムスキーは、言語研究を内的な、主観的な現象として言語の直観的な知覚と連絡させようとしてきたが、それは経験論的な理論には失われてきたものであった。

(7) 彼の最初の理論的な枠組みにおいて、チョムスキーは「深層構造」と「表層構造」との間により明確な區別を設けたが、今はそれを控え目に扱っている。彼の初期の見方は、クロード・レヴィ・シュトロースの「構造主義的な人種学」の言語学版と見ることができるとであった。この構造主義的な人種学は、心の普遍的で深層構造的な側面のみが人間生活の事件に対して受容できる説明を与えることのできるものであると主張する。チョムスキーの不決断は、彼はそのような見方が要する基礎的な哲学的仮定に必ずしも拘束されることなく、この見方の全体的な研究の枠組みから利益を得たいと思っっているようにみられるということである。

(8) ダイアン・マクギネスは、「人間と猿との四つの主要な違い」を指摘しているが、「それらのすべては結束して人間文化の諸要素と加工品とを生み出すのである」としている。その違いとは、言語、莫大な優越した記憶力、自覚、および細かな運動動作をする際の優越性である。部分的には、これらの特徴は、脳の違いによって説明できるが、マクギネスは、「人間の起源を理解しようとする試みにおける主要なジレンマは、脳がなぜ、またいかにして大きさにおいてそのように劇的に変化し始めたのかに関連している」と指摘している。人間の最も近い発生学的な親戚、チンパンジーは1kg対8.75という体の重量対脳の大きさの比率を持つのに対して、人間は1mg対22/9635の比率を持つ。(Diane McGinness, "Was Darwin Conscious of His Mother? Mind and Brain-The Many-Faceted Problems, edited by Sir John Eccles, p. 30)

(9) 性相と形状の意味のより徹底した説明については、Explaining Unification Thought chapters 1, 2, and 3を参照されたい。

(10) もちろん、チョムスキーは心の存在を認めるが、心は独自の実在であるかそれとも人間の脳の最高に複雑

な構造の産物であるかは、彼の著述からは明らかではない。この哲学的な不決断は、チョムスキーの理論の不決断に反映されている。

- (11) しかしながら、統一思想によれば、性相と形状の二性性相は実在のすべてに浸透していることは留意すべきである。従って、動物でさえそれ自身の性相を持っている。従って、動物の中に一種の原始的な言語を発見することは驚くべきことではない。統一思想によれば、細胞でさえ原始的な意識の一形態を持っている (EUT epistemologyを参照されたい)。現代の研究は、動物は、以前には信じられていたような「デカルトの機械」とは全く違い、あるレベルの心を付与されているという証拠を明らかにしつつある。従って、人間のみが「人間」の言語を付与されたという時、私は、動物は「動物」の言語を付与されているかもしれないということごとを排除しているのではない。(W. H. Thorpe, "Science and Man's Need for Meaning," *Mind and Brain—The Mind and Brain—The Many-Faceted Problem*, edited by John Eccles, 参照)

- (12) これらのより広範な説明は *Unification Thought Institute, The New Cultural Revolution and Unification Thought*, p. 37 を参照)

- (13) 上記の註(12)を参照されたい。

- (14) 内的性相と内的形状は性相の一部である。その説明については *Explaining Unification Thought*, ch. 1 を参照されたい。

- (15) これはズイークムント・フロイトの分析的な心理学の言語学版とみなしてもよい。それによれば、人間の行動は生の「表層構造」の事件によってではなく、むしろ深層心理の「深層構造」によって支配されると

いう。

(16) ソシユールの「形態」と「実質」はアリストテレスの「形相」(eidos)と「質料」(hylē)に類似している。構造主義は、観察の影響を受けやすい諸表層構造の間においても区別をしている。言語あるいは人間一般を理解しようとするどんな試みも、深層構造の追求に基づかなければならない。

(17) 著述家はしばしば、これは真実であると思う。言い換えれば、著述家は作品を書き始めるのに、自分の言いたいことに対するやや漠然とした考えを持って始め、それから、それらを表現する過程でその考えを明確にしていく。このような現象は、思考は言語的な表現なしに存在しうるか、といった心理学的な観点から見た言語と思想(または思考)との関係の問題を提起する。統一思想の性相と形状の概念は、これに関して大変有用ともなりうる。両要素は相互関係にある。従って、一方が他方に影響を及ぼし、その反対も共に極可能なことである。しかしながら、性相は主体の立場にある。

(18) また別な例は、賞賛の考えを持ってもそれを表現しない、また愛の考えを持っても愛の言葉を発しない、あるいは、激励の考えを思っても激励の言葉を発しない人であろう。そのような場合、そのような考えはむだになる、なぜなら、それは実際に表現されなかったからである、と人は考えるかもしれない。従って、言語も実践の一形態である。

(19) チョムスキーは、彼が普遍的なものであると考えている意味的な要素の働きを明確にすることにおいて、より成功しなかったということは留意すべきであろう。ニューメイヤーが指摘するように、この分野はチョムスキーと彼の弟子の幾人かとの間に議論を巻き起こし、この問題は完全に解決されたと言うにはほど遠い。(Frederick J. Newmeyer, 1986, *Linguistic Theory in America*, Second Edition, New York:

Academic Pressを参照されたい)

- (21) 他方、なんらかの意味で、それぞれの文化や慣習や特徴を持った特定の言語の存在を貴重にしたいと願う、そういう意味というものがある。言い換えれば、言語の多様性には一定の望ましい面がある。例えば、日本語は日本人の魂に最も適しており、普遍言語を創造しようとするどんな試みも、日本語や他のどんな言語にも典型的な特徴の喪失につながるように思われるであろう。しかし、統一思想の観点から見れば、普遍言語の存在は、既存言語のユニークさと特徴の保存を保証すべきである。

- (22) しかし、両者の立場は相互に影響し合うのである。ある場合には、形状において始められた変化は性相に影響を及ぼすだろう。例えば、体が病気にかかっている人は、その精神もある程度影響を受けるだろう。しかし、幸福や病気の精神的な側面に格別の注意を傾ける医学の分野があるということに留意することは興味深いことである。

UTI, The New Cultural Revolution and Unification Thought, 92-93.

Ibid., 79.

Ibid., 78.

- (23) (24) (25) (26) 大帝国によって成し遂げられた統一への試みは、真に成功したとは考えられない。なぜならば、周辺国家に押しつけられた文化は、以下に論ずるように、文化の統一のための中心となるためのふさわしい要件を備えていなかったからである。

- (27) 歴史を悪の方向から善の方向に転換させる手段として、歴史において闘争が現れたことについての説明については、Explaining Unification Thought, chapter 10を参照されたい。